

^13
3846
2



13
3846
2

和歌

和歌

花葛蒲澤の葉二編序

銀坐四丁目十六番地
貸本詩
好文堂

川柳名の穿よ春草のつ桃文だけの情を吐と
言ふ傾城の道未あを懐とらる意あ長ま
私情を苦芳をせぬ花と六緝屋の主人が小京
那むとど嬉女よ哀あり実河と初會徳の水色
ホシの浮氣よ褪やましく別深の情を草紙の心奥
度泣あまも鞠の夢の晴深も美情と流情あま

間文を河竹の藩の志にぬき、遠度發見する小冊の
 外題を澤の葉との由縁の多の先萬葉の
 樽箱を重修の觀世水子園と名づくる。紀伊屋屋傳所と
 傳の松葉屋の若村の訓澤澤の身のと語し
 原本をなした趣向あつた友禪澤の流友の山亭
 有人如之を揚かす澤本を御流よかけし仕
 上の筆頭教あるものから二編をことし流を修す

二〇一

後澤の筆の系は澤せと云ふ意と卷し
 い口か緋屋朋白述との日延もあまを新紀
 二巻をふん廻しの廻り巻を漸く採り
 澤と日局の割とあつた。何にせよ澤を新紀
 の誌し

三遊亭周朝記



花菖蒲澤之紫二編上卷

東京

三遊亭圓朝作話
山々亭有人補綴

第七回

花ハ紅海漸然とてく騒有る波るは瀟々小舟
 教彼瀟々以流の曲江處よ色まされ南廻む芽ハ春
 風小鏡ぎ初湖先よ結座を辨才天女の華表ハ
 瀟々せよ吹花廢宮居ハ附くの津波よ折まどと
 和光の蘇赫亦々々羽根田の濱の片遠り芽華

家根も行向く橋は極る一八の皆名流あく旅
果つ壁の作組を津あつと一我が頼よ舞の菓の
怒ひろげつるあをさる家の門は明く千ト物か津
素中夜ごうりますアノ梨膏の重賜さんのおい
活方ごごうりままらト云ハ年流四十六女が匠
流三十七八うと思える程の大年増十七八の處女を
侍ひ丁稚を侍よ連れけらる處女の例の侍と勉小言
号あるか香あさる年増といふハ万年町の園中屋

が後家か言政七もか香あも貴園か一母あり
けりそ家の主人とわたりたハ去年より福ひよあつ
とさささささつと打外看ししが史とえらるる浦邊を
遠出可れりく一河内室さる嬢さるも一和さ
大遠か思くハア大伴極の出来りさる時夜川橋に
か海りとさ橋か事さごごうりますさ橋あむさる
しい布の裾とをか入来りさるりたマアくハあがり
と成すト浦邊片寄二枚折の破き一扇風で

思を深しむるは、
高き様におもひをいれ、
かたよ重なるに、
より衆での活し、
史の集るうと、
歴し、
久し、
やい、

蒲雪のよよから、
大分快字を、
しと重なる、
て別筆を、
そる、
い、
イヤハヤ、

河原様も申せんとせし少の間にあはれぬも
嬢様の世成人立派にお嫁の盛りのありあされはし
た旦那様も若の内室様もお替りのござるませぬ
高ハイ仕合と堪を違若く若りますら愛つた者の
重三郎永年不調法もあゝ実体は勤と七年の
別家をさむる事と相違も極このを法正月の五日
小政七の屋代よ金蔵様の年頭のお礼よおろし磨
磨を遠春と一を角よお梅よ下つて間違といふ

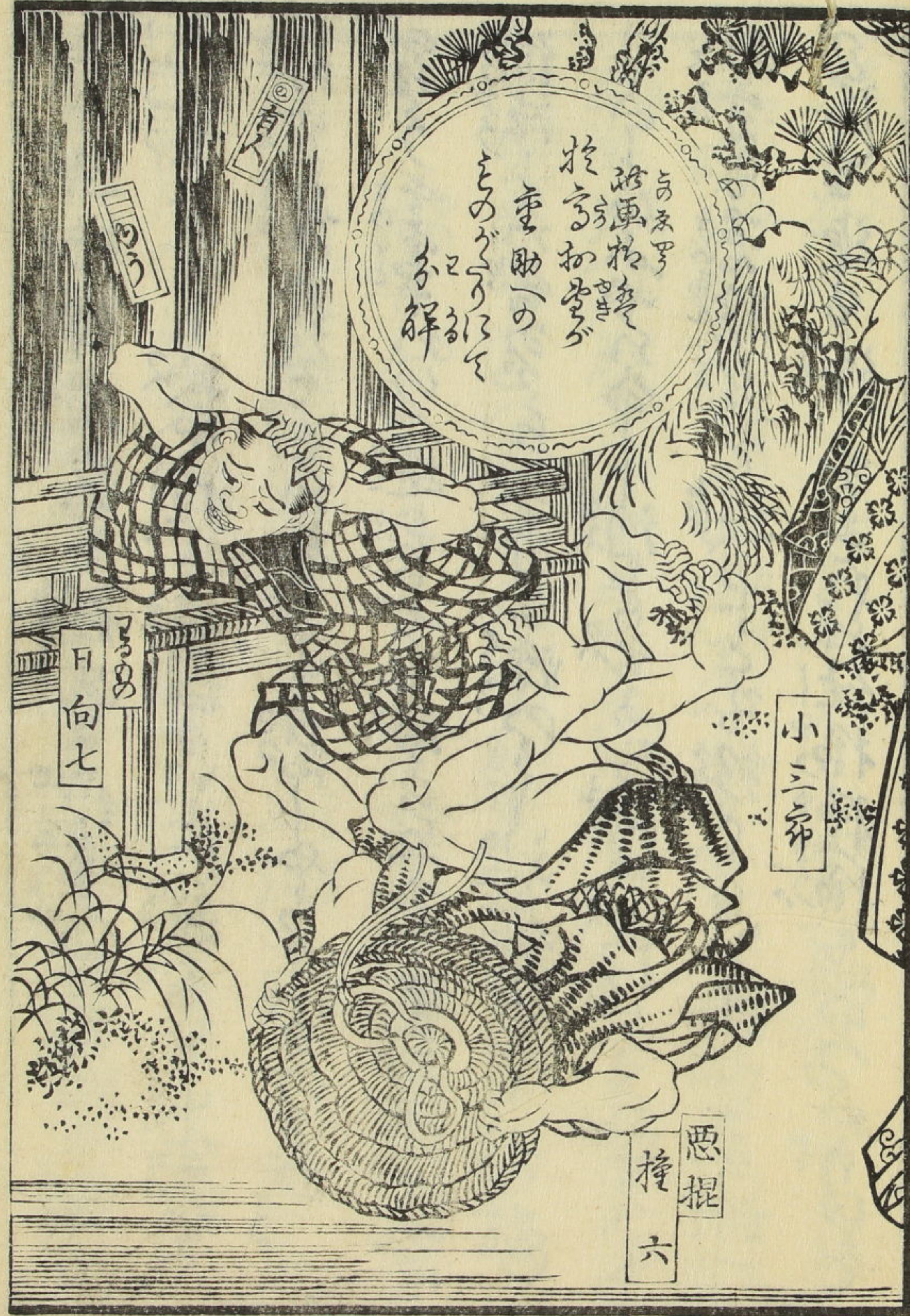
金蔵様も重代の刀を奪はると云はれ無きよ重三郎
ハト治と兼まじり重助さまの御事
仕出ろ一痛くお梅とく野郎のどう仕出た
揚ろ一妻よ身を投ろ死よあ一下時ろ一櫻結松
ろく重助 高おまも松りおごろろく史ろ
後の大興勤金蔵様の世成人立派にお嫁持方も頂て
因縁あるお嫁のあがら定め一お嫁入もあつて
史の仕方があつても一ろお梅の梅垣様の御身お

吉左衛門を清く看るとの事一業のまじりの清く
あつせん守あよ者の取も毒らまじくを大伴
や弁天梅を一人乱れ又祈て清くつる刻時を
も何ろうの小三郎梅が世懐を六連くあて下まつる
き附の嬉しき落はる根をら掃くありし一
そまの深雲車とごうりあしは懐梅も煙悖然れし
あしころうし正実よ昔梅ヤア思怖くごう致ゆふと
あひまし一ヨ若母梅があはららとおのるるとけりぞん

トて看つら右梅をいあて清梅の寂莫のりきれ
てまをい梅の河の波と鈴が森に出るを雲霞が
懸て云車をうりわて教さるゝとあて看つらま
丁度今ああのをしと弁天梅の清雲の後を折梅
き附小三郎梅が世懐よか通あをとあおて雲霞を
追拂ひ余津を返送しと下さんあしは地獄で
佛といふるの根人の中を事とつあはんと山雲
のちかくで佛とやのる有ませうし出先とごうり非

まは是も茶へと申せど重なるが不存九也な
されくわさるまのめく一はてはも活らうあらハ
習ふ一も是奴能それで人問らうく身を
扱く死をうぬ奴が扱ふ不存者と親のあはれ
命一がうも田醫者又活らうも命あうら七年の
牌が別あをうく春春のいさく梅より暖簾をか
かす下との事せめく暖簾をねえして死な後
なる何年中迄存して居候めと然らうく指すと

ゆきも自己が得を勝て牌めが不調法より梅
梅とやらうと且梅が河岡屋あること六忍入
とやうう清氣の毒と申さう河を彼中と梅
もあううあせんをを下め且梅も勝奴と
思ひ梅を色ても是難なるや中梅が河自身
あううあはれ態く一とあはれ下と六難五と
忽得か河の因果と結年迄活せうく梅を
悲観活一を破軍と是を思ふ六秋一た梅の



余ッ種焼俸者りつと親父又お主人の骨をもめて
死なざるト杖や柱と囀るるに我多を先きとく
存せ意あれたぞといおきもあつちからこのら
あうき事へらつ述もてもあらぬ事重三并が不
潤法といふあがら女并よ海へ引負へて
一とらふとあ一河をさゆも海の上をいおき入る
世方も苦難身を投ぎとも勢くんと改てよと
日し追申活一をまれが社振種振もあつこのを

史も死んで子の年とやうく今更きともあつと
夕晩女孀が世少の間をいぬのをさ入昔傳の心記
史を思へばあまのまの地もも人りりささど
心細らうとつと女骨あまのまの思ひやら
あまの海へ居ま一た重三并が昔傳の爲世後必む
あまのよる自由のよせまらる活く思へかいら
た居一とあまの海傳のあひのよき入りなりお園り
たう女孀の乳母が抱んて居るから昔傳よとに

ませうト亦あるまき大罪を犯し一室を掃くも
せむしのる迹極極くまるか高の君非よ重財の
難有海よくまおつう

第八回

時時あるそ 忍侍をんまか烟をまきおの藤より
野原がぬりうそく 煙あつてふ成陣鼓をたのませう
見るそ人鬼の煙さうを荒くまき一海あつて世をよ人鬼
いおつてゆを前の煙さな影が伏るくく一氣を付て飲も

積葉の葉ト水をも海よりゆきうた不自由なるまきぬ
た箱なる迹山も頂を六余の思多ぞん下外天かまき人
誰の園のものも回るる子世活をまきよと成て下さる
骨が何のやア大きよ匣子史がわや重財度赤世活よま
まきが来を氣も流るら餘り風よ商らぬ指よかよ
た箱よそのまぬ澤を考ると體の毒だらら必氣勢
か思ひたかひ目見れ餘り葉あつてはまきた好まおのまき
喰てお果ト一室を金のみまき少知子と重財をまきお

河上春のあはれやとてくさくさ
たぐく物産あからけあせり
あはれいごさうませんがど那極は
久折南の思ふだうらうら
髪を取部一件の梨箸袖よく包
室脇がさの隅へ見廻し
涙ぐもして別色はけり

花菖蒲澤の紫二編上巻

花菖蒲澤の紫二編中巻

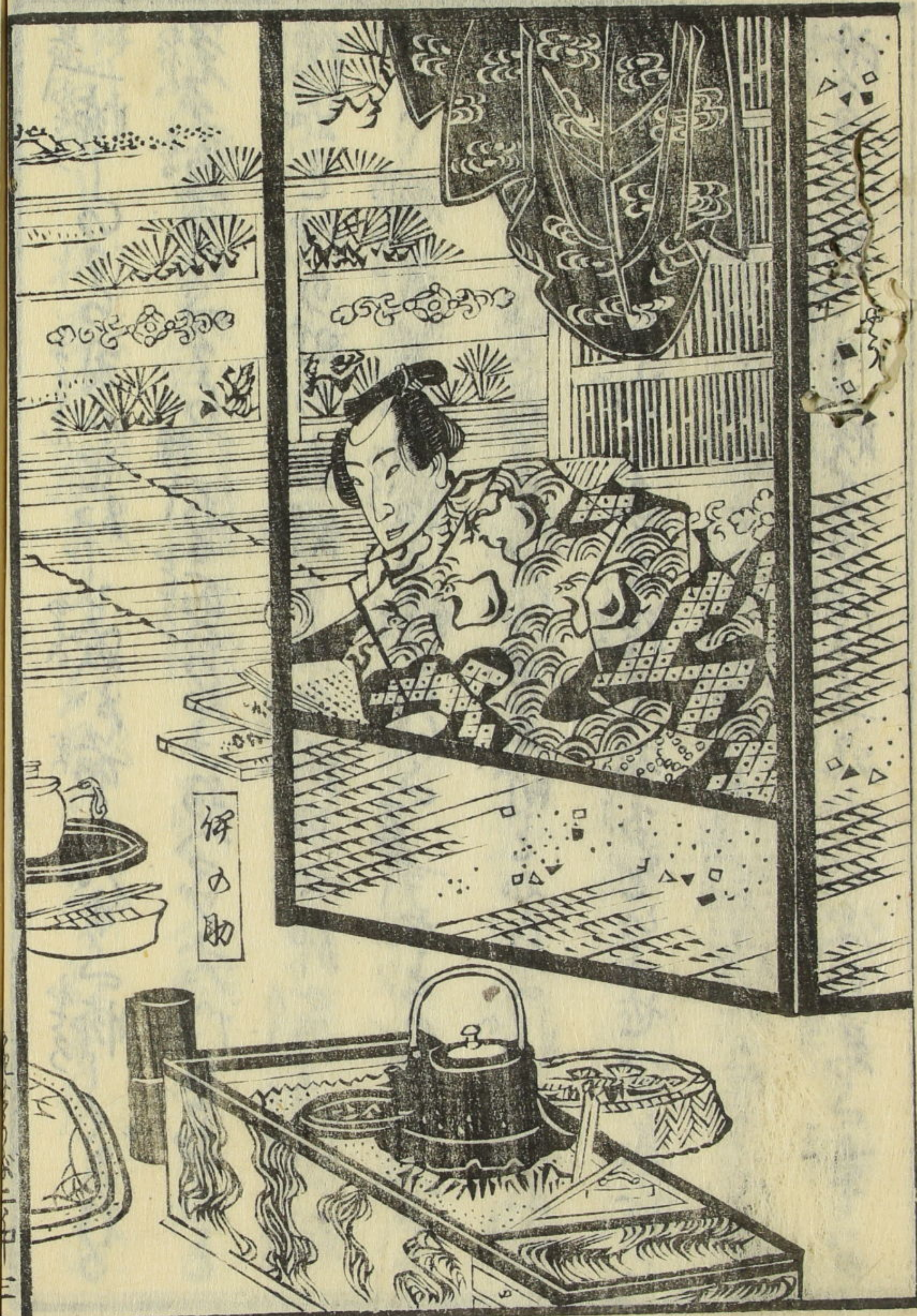
東京

第九回

三遊亭圓朝作話
山々亭有人補綴



城城する玉顔紅粉を糝と詩ももらるが
か國の春をむ若州と更め仲の町は
ひあよ十倍一者保の恥を思ふ
慕るよ等しけきバ仔の恥も亦是
如く膠の如く麻布は出さバ俱よ



川橋の大門の強んだらぬ能くあらば代の若き
一件をあらせり又霧の途途中で霧と笑難く
思ふべき逢別あるのを逢ひよ出るけく大蔵の山本
て逢ふこのふり逢ふが及所を「たあらどと」惟ふの
らあり「あやうられこの」
氣をひのきせんぞとせ始の百年所のお名と
やらうはと極く若海の丁度阿古本の極よ意ら
のふと「あやうられこの」
そん秋をせまらるる交機「の」
海よ死をも「あやうられこの」
の啼あは目「あやうられこの」
あはらるる「あやうられこの」
極よ「あやうられこの」
と成だらうと「あやうられこの」
若「あやうられこの」
あはらるる「あやうられこの」
あはらるる「あやうられこの」

その秋をせまらるる交機「の」
海よ死をも「あやうられこの」
の啼あは目「あやうられこの」
あはらるる「あやうられこの」
極よ「あやうられこの」
と成だらうと「あやうられこの」
若「あやうられこの」
あはらるる「あやうられこの」
あはらるる「あやうられこの」

若料わかしやうの然しかん然ぜんあり 糸いと糸いと若わかし女にょたるをりて悔くわいあり相あひま
 方かたよせん事ことを全ぜんむべし津つより伴ばんの海うみ由よしをい
 なきど若料わかしやうの揚あげ格かく日ひ格かくの輝ひかりあるよ代しろの若わかしい出いで
 トとて初はつめより受う悟ごを徹てつべ初はつ會かいはを候こうむ令れいき
 ども被ひ侍じやうの囊ふくろ中ちゆう願ねがふ豊ゆたかかれば若わかしもあまらばたあ
 あかかき赤あか仔ごの胸むねが懐なつかし助すけ刀たうともありあんと
 方かた若わかしせよ下しため凡おほ小この因いん成じやうの葉はや侍じやう若わかし女にょ并なら女にょ新あらた
 逆さかさめぐ勸すすめたりひまむべ可たがき思おもふとも云いふ
 何なにも思おもふ若わかしを為なせんといふるまよふ事ことを促すすめ
 たりまよふあり

若わかし海うみ切きりの難あやう有あるまのまが今いまが今いまといふ海うみ中ちゆうも性しやう
 はまやあつら何なにもこと聖せい日にちの若わかしよあてあんと候こう
 若わかしそや若わかし表あらわ成なり事ことあり聖せい日にちも思おもふませらうが
 聖せい日にちもあつても同おなじ格かくみらるるを云いて若わかしも若わかしア固こり固こ
 中ちゆう若わかしせ 若わかしまぢやア若わかしも若わかしも後のち刻とき逆さかたりかんと候こう
 若わかしあつら若わかし交まじり若わかしも若わかしも若わかしも相あひま濟たすけし

いけんを云々くおん^{あんな}のを^{それ}使^もと^の云々^く克^く
考^{かん}く^くえ^えせ^せら^らと^と方^{かた}極^{ごく}云^んく^く無^むの^のん^ん心^{しん}ま^まら^ら亦^{また}
近^{きん}事^じが^が来^きく^くと^と云^いつ^つて^てお^お察^{さつ}の^の夜^やが^が来^きた^たん^んで^でま^まの^のサ^サに^にら^ら
と^と云^いお^お前^{まへ}ど^どの^のま^まる^る積^つり^りだ^だ一^一船^{せん}と^とい^いふ^ふ思^し案^{あん}亦^{また}有^あり^りま^ません
が^が神^{かみ}の^の町^{まち}に^にあ^ある^るお^お入^いら^ら河^から^ら被^ひき^きお^お前^{まへ}に^にの^の報^{ほう}界^{がい}
の^の云^いら^らる^るあ^ある^るの^のも^も河^かの^の中^{ちゆう}で^でも^も此^{こゝ}氣^きと^と毒^{どく}で^でま^まか^から^らそ^その^の所^{ところ}
お^お前^{まへ}を^を極^{ごく}く^くえ^えせ^せら^らと^とも^も思^{おも}ひ^ひ中^{ちゆう}ま^まま^まと^とい^いふ^ふ被^ひき^きせ^せら^らう^う子^こ
保^ほに^にと^とん^んご^ごお^おた^ため^めあ^あう^うが^がお^お前^{まへ}と^とも^も情^{じやう}入^いり^りま^まる^ると^とも

お^お前^{まへ}の^の報^{ほう}く^くお^お前^{まへ}ま^まる^るの^のご^ご体^{たい}人^{にん}よ^よお^お後^ごの^の積^つり^りの^のド^ドレ^レ
幾^{いく}日^{にち}近^{きん}事^じして^{して}も^も存^{ぞん}ら^らま^まと^とい^いふ^ふと^とま^まて^て是^{こゝ}物^{もの}を^を為^なす^すに^に
か^かま^まさ^さら^らマ^マ直^{ちき}つ^つと^と成^なす^す積^つり^りよ^よあ^あを^をを^をら^らく^くあ^あら^らん^ん
て^ても^も直^{ちき}つ^つら^らや^や有^あり^りま^ません^ん河^かも^もあ^ある^るを^をく^くら^らや^やあ^あら^らん^ん
自^{みづか}己^ぢの^の積^つり^りの^のご^ごも^も宅^{たく}に^にあ^あら^らな^な女^{にょ}前^{ぜん}を^をま^まに^に計^{けい}り^り積^つ
ち^ちや^やア^ア用^{よう}ら^らま^まる^る也^{なり}用^{よう}ら^らあ^あら^ら有^あり^り積^つり^りよ^よあ^あら^らん^ん何^{なに}も^も何^{なに}も^も
う^うら^らマ^マあ^あら^らん^ん積^つり^りと^と成^なす^す保^ほの^のた^たん^んを^を極^{ごく}く^くえ^えせ^せら^らう^う好^{こう}ら^らの^のん^んご^ごの^の
お^お前^{まへ}を^を取^とり^りて^ても^もお^お田^{でん}ひ^ひと^と成^なの^の又^{また}馬^ば鹿^から^らい^いち^ちや^やア

有ま入んう正津まんとんのやア湯ゆと之これ龜かめ産うらうも駿河屋
うも休やすえ湯ゆ湯ゆうもあまうと云たのい幾いく度ど
う志しませんが皆みなを以もつて此こ前まへをんより休やすま未まごか
前まへを雨あめの事ことのりませんが此こ路ちの湯ゆ家やも空まが不ふ首しゆ
尾びのといひ話わを時ときまうころ西にし買かひよりつたを社しゃ倉くらのま
うらへ雨あめのも風かぜのも形かたちあうも此こ国くによかいらるるい無な
指さしまうら此こ不ふ首しゆ尾びあめいあうも人ひとをあてても
あうこの世よあめいあ前まへをんの存ぞん物ぶつもあうううと思おもつ

この事ことあんでまがまうるとか前まへ指さしまう氣き悪わるくあんと思おもて
まうらうんあう前まへを事ことう連れんう以もつて社しゃ倉くらまきア子こ孫そん
うともどもうも勝かつちよと成な中ちゆう。人ひとが味あじたう切きこと
まを産うまう腰こしを志しのちやあう下した 前まへ指さしま
まうらあ子こ 前まへ指さしアとみせううのませんううう人ひと方かたあ
女め前まへあんまよ連れん上じやうあうものうべうあうあトあう連れん釋しやくを
伴ばんの胎たも志しまうの裏うら痛いたまあり腎じん年ねん刻こくの時とき中ちゆうのまうる
以もつてあうるを腰こしまうと足あし音ねをうと階か子こを下くだり

若し若者の為りも味を素直に毒に疑おせしは村側の
長次未喬同二階よりあがらそ閑洋を知らじら今
仔細の物しと破る二人遠く往遊りて出所より

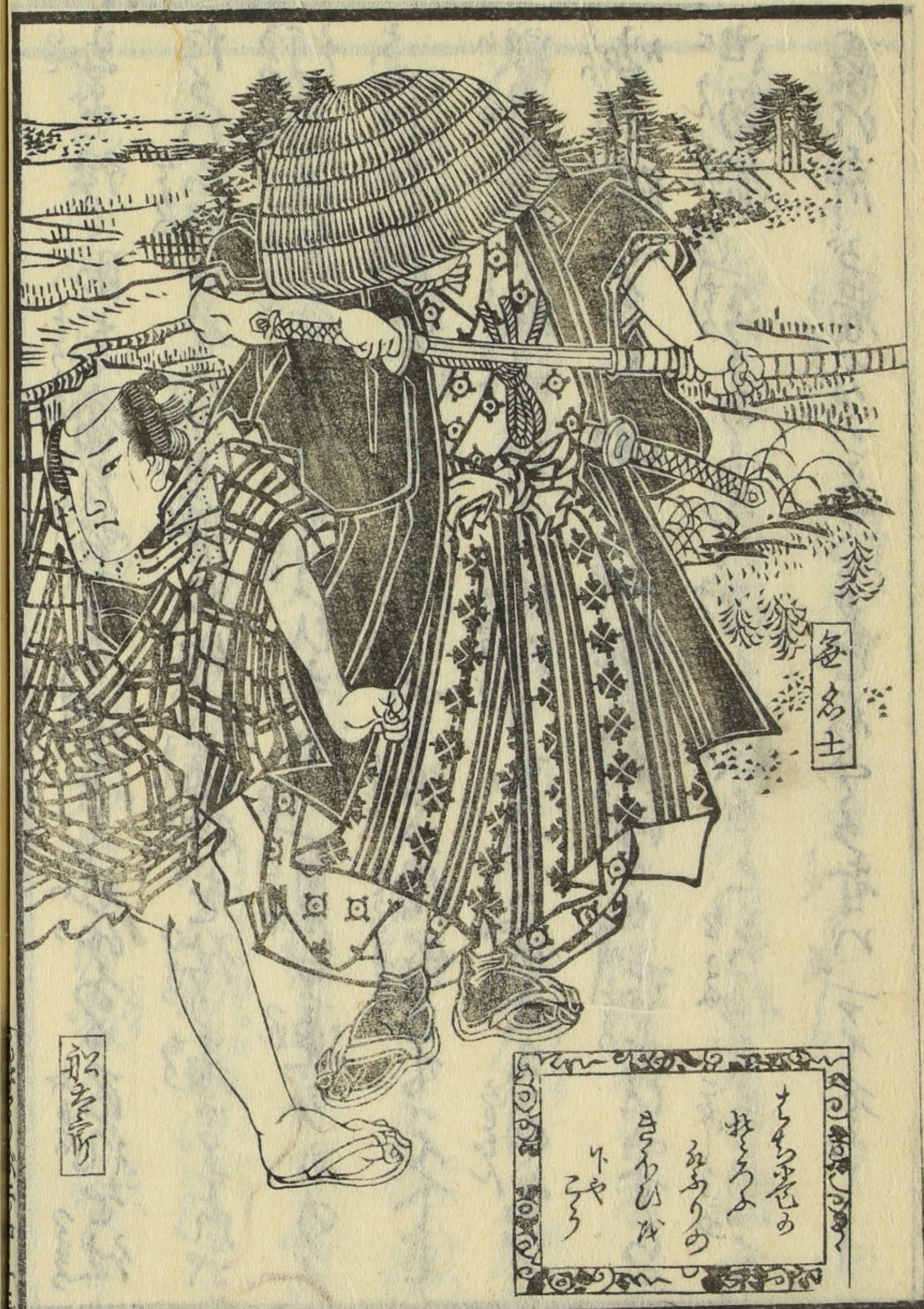
第九回

東ア引若旦那 西ア田舎中ト或人の物より
唯暫く仔細の立止り お希望の程今く事さす面
のよ 西シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他
合ざる道に不釋り 西シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他

此路知あつらんその程よ中一廿の定名ともあつたや
有やせん 東シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他
と思ふやま 西シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他
もあつたやま 西シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他
いとて若少も惣念あつてへつらまサ棄ぶたはら共今
若も亦ふらま 西シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他
大七弊情よ若からま 西シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他
侍と若の目よや 西シ若旦那あつらふ本懐の程今く好漢は他

近々の舞て例の侍たること思入のをさるけりしつ
女僕の侍にても仕つたらうきまを此のまゝ通用
致さうもあゝ山さん下置りあらう侍の恥をあゝ
おる後よ突つちてく指を味居し海客世に計の
深編蓋よ黒路の羽織きうらうよ若傲し矢折棒
うとるる長きある大小横帯しおちも云て長次
舟の物くく取て前引指 海 町人侍がめゆ致し
ト云うれく長次ハ龍多青足おのれ教えて習さ入

しむを侍と恥未着左衣より へい ぬあある 尻れを仕
たふん心持せせんが世流の如く満癖を仕り指もそれバ
何事也物事の程を教ひます 自じア連のりの
ふへい 長指よひさります 可汝ハ侍形とみる人さ
賢者ぶナ強味たえ酒粒もせよ武士よる云を
ゆき 癖するらう侍でお海とらぬらう 酒をひらすら
出物糸 兵のあゝんハ指の奴めと云指よ春園て
長次舟が眉るのめいもをさるけりしつ へい 矢折



何卒由免と成して下さるま 伊豆殿の由をせり
ますは若那の卒由勅命とせざる候も物只下
遊とほしあつても若那を打んとあまおつら洲の金路
焼店と認ひ一人連中よりき人頭出今振上
侍の二の腕とらん侍を延一若那の物づら取る
手を振とあつて近づくと思ひてあつたは
ハ長江乗着舟の舟の毒蛇の口を適き一ハ地
後をもつてと一廊内の雲を度と近づく

一人あまき 妙ハ一野原奴ハ余程好の奴
だ子武士の喧嘩の相手を延一ハ若那を首尾根
柄の氣の作ハ切らまきハ死に覚悟ハ喧嘩の根
もハ彼をハつてハまきハ高きもあつてもハ
相手を自心ハ延一ハ両手を突く候ハ奴を切つた
ハ侍の相柄もあつてもハ延一ハ若那ハ若那ハ
サア腹らむよまきハ切きハ切らうとせりあつた
ら切らう首ら切らハ負走働もハ鼓ハ若那ハ

首筋逆しく自若く臆する素文の更よるを
ねん 町人怒入るに直騰り中へ武士も及をあら
物着も遠海程の上へ今の男を打撃は乃ん
衆堂もも難かきあつたは手をもく一徳入る
併くこれ 〽徳ると云ふら 物事も致極を差を
徳ろユウ安や面をえろく 〽イト云ふは安倉の神
どいあつたは横長形に打らるは件の浪人逆と
出たれも同く廊中へ一國教は逆のまをを

通まると件の男怖がる連の町人を徳引船を以
るひく是もまの廊をえろく 〽入る
并も女者の別人あつたは万年橋もく重三を
船一舟の船を舟ありを附よりして重三舟
を自らも舟に引かへるは同く安倉とて
辻の渡世の若あつたは船を舟ありを附よりして
あつたは重三の者あつたは一月五日の朝新橋
より深川までなるは重三の武士のまのまを

重三郎の刃を奪ひ一燈籠に燃ゆると活一の
符合あまよを船火の伴の安藏より舟を
一と圓形と一今見の儀草聖日の芝居と
人あのみきいを遊りあやめ武士とていけれ
バ燈籠を付け刃を殺せ重三郎の仲身をた
撃定はるるをりしと波面や家と津細を
どまらざるをひびきりしがと自らちうらむを
より竹藪中を素人と金澤橋の茶亭より観ひて

新開澤の仲のへつら連の御入り安藏と
削の重三郎あり

船をど探しと志まぬらんゆきの橋を
たよ遠舟人富ちつと宴とあたるも
橋く細く葉うけまらむ方橋もあまは
ゆらゆら重三郎侍も舟を遊り遊
も遊友と重三郎をひらき指まするも
たとえ人あまよの舟を遊り遊るの

侍のゆきを誘うと三人の金環燦る茶
亭よあびりといひたうけを

花菖蒲澤の紫二編中

花菖蒲澤の紫二編下卷

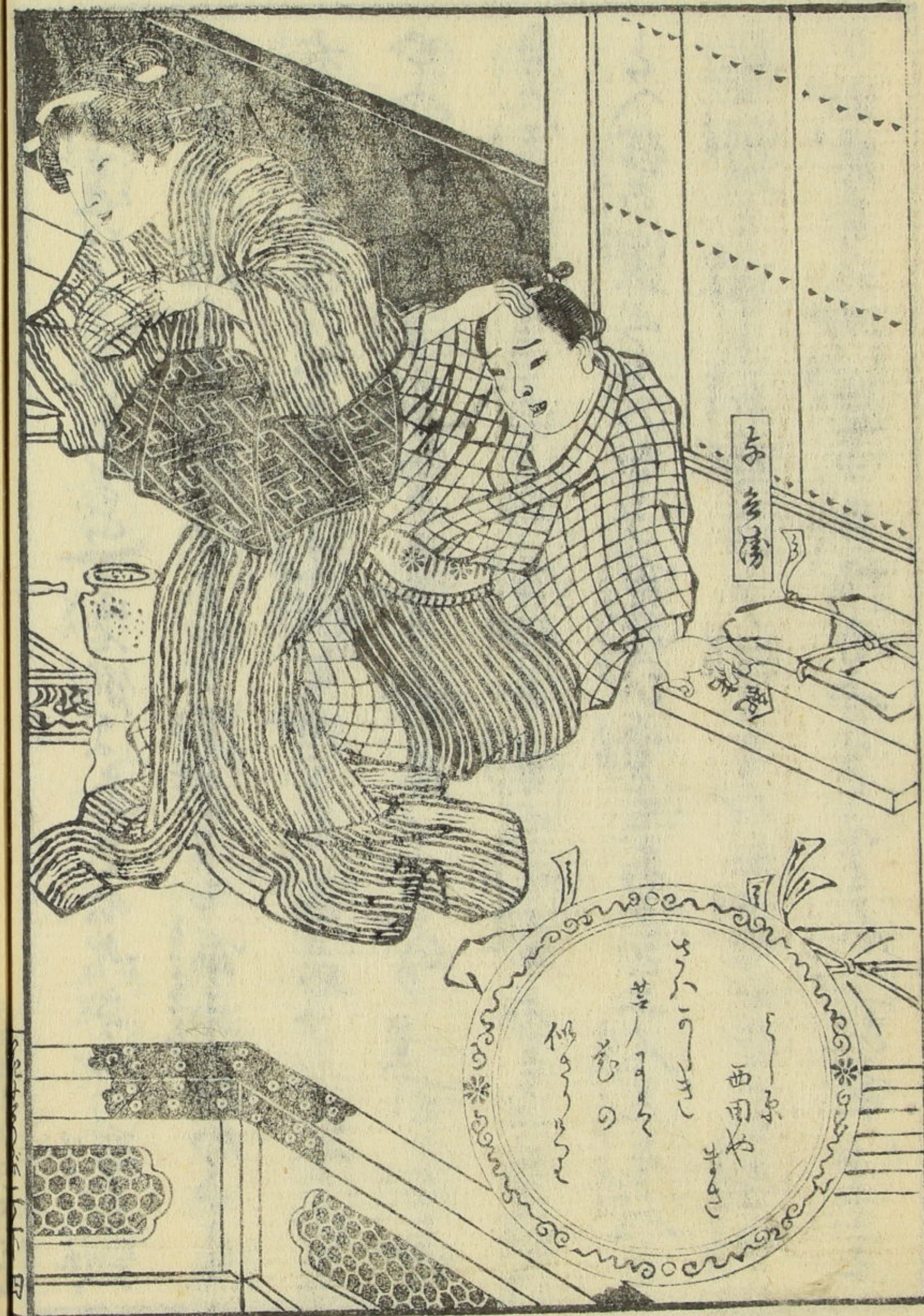
東京

三遊亭圓朝作話
山く亭有人補綴



第十一回

出陣遠慮高く鬼神齟齬を影自せ
段除の所臥に箱棟更よ青海浪を巻出せ
し海とて身代をなよ表せしものあらん
に於る格子の肉の粟丸太はく團ひ是に彼系清が
牢屋あきしし流燈を隔ぐの百瀬とおがし



ひん理屋りやもア性せいお入いうらの事ことヨあんが女にょももののを
考かんがへくしお入い性せいをオ奥おくにヤよア若目那わかめなさなの
由よし身みのふよ薄うする日ひけぢらアお入いうか前まへの雨あめの長なが次つぎさん
も永年えいねん若目那わかめなの由よし是負このせもあつて事ことだうらま
雨あめを思おもうく大おほ概がいの事ことハ我わが性せいをいへる思おもうらま
のんぢらアお入いう豊とよにヤアか前まへさんが狂くる作しやくどと大おほ概がいか
事ことあつて我わが性せいをいへる事ことまを若わかめあぐる後のちを許ゆるさる
恐おそもつてお入いません畧りやくの時ときをべんくとも致いたして由よしらま

おせんうらあまは奥おくにヤよとせうと云いよかゝるをふ
云い清きよハ遮しやり子こお前まへも餘あま程ほどうらお入いうか奥おくにヤよ
真まんぢらあま先まへ刻ときうら口くちを破やぶかお入いうか腕うでづく
心こゝろもまお入いりあま性せいをえろお入いうら入いとわかあ人の
事ことだ性せいあつてとせまゐるののトおま清きよを突つ除のぞ性せいよ
うれが傍かたわら觀かんあせし代しろ丁ぢやう雅みやび多おほまお小こ粘ねり壺か觀かん若わかの
蓋ふた杯さかづき携たづなまゐる折をりうら傍かたわらの紙かみ門かどひらたぬト出いでる
お入いの肉にく後のちお入いんごか前まへまゐるまゐる花はな刺さし地ぢを若わかを

手代丁稚を叱りあはしし 可レ女子云清き一くものごと
か前迄が立駐いそとともあふ下たるあつてかまを
見あり 内 下めくをますがか前が長次夜のが速合ら
豊可や貴君の内室様 沙屋和迫の毎夜あがり
沙屋正中とい居ますが深川 世様振も中ませあん
だ唯今をき勝さん迫わがひまごが去く 世長負
いふれあした長次郎後もトさつとせと内長
か他引も云むとも襦袢も 妻妾様もい候ま

長次夜のひんか横死場を破き入沙氣のおきく
か前の結場へ 一と案やられて襦袢も 世長負
かあおきますト 腰庵を拭ひあがら 人の死は角
勝下りりのごか前の方での体の筋が速くはま
長次夜が影と非業を死に違まといとお思ひの
内を解ゆる所身持まあるまらうと思ふハ時を
清か前いたりの清きを根か清らと云ふもご

世の人情マア種々〜活も仕交はせしど異の財分禱を
か入極あま人も夢がが夢ごころう是ハ寔ハ怪少で
何の是〜もあるまはせしど旦那もお悪女お悪女
ありホシ〜管舞の意をうり不肖も有らう取めく
か果〜とあるとあると刻ト〜と分金五十兩
と能〜あると可哀のあ巻最よと云清と端あり

云筆ひ〜事根秘命もか能の云どく系ハ長始が
そのし〜きよとお通の文紙又迷ハ勝くハ申〜と
務よ能ある七夕の文のあ〜と肉を形形の系
より〜ハ其見なり〜橋の系の楯取事もある
まきら出入若の帯あるを偶よ信ま〜と鶴の橋渡〜
やう百門やう親沙の身よハ五琴のち〜死骸を極
さまろ清く黄金を吊る銀河の極の極〜まぬ
か能の樹ま〜と意〜〜和ら〜金〜殺圓押〜とさ

子と勝をとりしめ驟の若も橋振りしとて一
我輩は有り長治郎の野道の送るをせしとあり
○姑より父總十郎が身よりのよりいづ様ありし
まゝ人の子ありしを辨ありし人命を失はせし世の
岐へ出入る交の思ひもめありしとて仔細を
寄奥二勝より押着定久難懐又附んと云るを母の
お作の種よりよ良人を肯ありしとてお作は
おとと總十郎の諸もきよの親類の家あるんことを

打集りて辨定ありしお海區にりし一決せし命を
男年町ある岡本屋政七遮りて是を止め一端の
よりお作を子を勅通りて後悔する者せよ少くは
伊の助度とて系末曾流の性ありしと一時表裏と
る過に見えられたるのとお過さるを過るの系
判案より立ゆらんハ必定あり勅通せし子の愛を
時作遠ひの夜敷杯居たりしとてお作は
堀切の別荘より押着河津よりお作を交通を停止し

うも志まきまへんヨ 八人の馬麻らの後ハ逆後と云
ますらう運目もも世ハ来と成るも志まきまへんヨよりこつ
遠く因言は姓も世らるる箇の一本づらひいあよこ
と成升ハ子 阿頼ごらうらうの思ひけれたあんまりア
後のがあいらら 西妻よた程おんます子孫のまんの物と
あまーこの河へなる子 可七夕よぬのまの目と
を妻とんや河のせ七夕よぬのか程を書てる阿妻本
斯うらあよ連ひる来て阿あまーの史ハ限言も沙姑

由世でまてヨ 七八九トより丁後二月よあり升子あひ
らんの懐胎の事も水知くかおんまのさうら達
若てさへおまを成りやア便りのあつとら事ハをさうら
のんてまら 阿の通り業健と志妻とんよ町田とんの
事あごまを海流奉よ著うらあんどまらうら
産物があまらや阿の事ハ正若るもよまらうらあんと
が史とも業も持る証言を類ひのども有まら
あらん史ハ右程と内流うらあをんを海よしじト

ゆる河の用あんま工 別家成ヨ旦那ちんの由と成
あやア浮のうんもどふ成ッたうくくそふさうそ格
ど河経大家の息もどもあど部を後とて飛と成る
のよあんあよ成ぐ一素と成ッちやや世間体も何と成る
空ぶのいん幸把をと成のうもあを成ちやあからん
どうの體が葱イ格も化の壞皮と遠ッくアかつん
堂の意とて身を養うく引込く形もあつらうのうんと
いふあがあまきく肉體の意もあつらう離れ仲の町とあて

うらも河のあ目も十人か人別様のあるかいらん成る
立派よ一とくあまを末と成ッたハア壞も社会自色も
儂律史程敷杖一と作の格がほおあは遠いと云て
あまあを取あぞとく為情も格がけい道と義理人
情をうら云て格あやアあ業もあまを成ッつあハ化の者
の宗もああもど道律ううハ今あつて是推くと云ッ
ていある一室の自色も團のさる師を成かいらんの體
の格もをさるとあが醫者あやあが相意も大病ア

極多ぢや月一は勅をまゐるのもた義づらうた夕暮
後道常のあはさくあてまきたら車は田中の別荘は
若生よりくあから若痛のやうな義でも若生が一而
又深く性即ちぢやうな身即ち人が安慰合て得る
はんの便があるのを清く返さふおらんよまあつらう
通り氣が狭うらり外若くはあ然一體又隣ぢやうあ
惣一とた若生がてを若生を呼ぶの夕若生ををわらん
よ命あのも極多活一これとあふあふ一おん二白を

新の大書を若くは男氣を仁ざらまきつあれりホンの
狂言綺語今時の極多若くは世あのみ那をんづら
お情深一仁の先多かひ有ません子エからんト今若生
の活一を情世は情ある主人の詞あを勅むるを若生
身をよめる身ある由責打撞をてありと勅さする
がたあを勅むる身は礼一の體とありしを比るもせま
一愛あを勅むる審よく若生をさするといふ安産せよと
あはあらんまお情は若生一若生あを勅むるがたあ

志士と若しうと志士ありとも代の事あると志士
史記は新羅をせんうと思ふまを史と返國あり兼て
小刀針の黄より鳥と義利とよ黄より身の若と
いぬぞと心の底を照しぬる海よりまらぬびは
海王にあらんおれんぬの氣おれや近津のかみよ史
事おれんぬとよ一まらぬ海ありとお思ひぬれんぬ
有ませんぬとよか客の西根をま且都んぬ近津の
義利代のお御座の糸のおとよかぬらぬとよ義利

近津の糸

とよまらぬとよとよ海ありとも心の底を照しぬる海よりまらぬびは
史記は新羅をせんうと思ふまを史と返國あり兼て
小刀針の黄より鳥と義利とよ黄より身の若と
いぬぞと心の底を照しぬる海よりまらぬびは
海王にあらんおれんぬの氣おれや近津のかみよ史
事おれんぬとよ一まらぬ海ありとお思ひぬれんぬ
有ませんぬとよか客の西根をま且都んぬ近津の
義利代のお御座の糸のおとよかぬらぬとよ義利

近津の糸

